



私たちはマーケットストリートを通り抜けて海沿いを回り、フィッシャーマンズワーフへ至る黄色い路面電車に乗っていた。開いた窓から港町の風が入ってくる。車内の掲示に英語と漢字があるのに気づいた娘が言う。「英語だけじゃなくて日本語も書いてあるんだね!」「それは日本語では

なくて中国語だよ。」と教えてやる。「どうして?なんで英語と中国語はあるのに日本語はないの?」「なぜならここサンフランシスコには英語と中国語を話す人はたくさんいるけれど、日本語を話す人は少ないからね。」「なんで日本人はいないの?」それには長い歴史がある。留学体験記のはじめに、フレッド・コレマツの話をしたい。



大学の寮



フレッド・コレマツは1919年1月30日にカリフォルニア州オークランドで生まれた。彼の両親は日本人であるため、彼は日本人でありアメリカ市民でもある。地元の高校でテニスと水泳のチームに参加した。卒業後は両親の営む花の栽培業を手伝った。第二次世界大戦が始まると軍隊に志願したが認められなかった。その後はオークランド港で造船業に携わった。

日本がアメリカに宣戦布告した約2か月後の1942年2月19日に、ルーズベルト大統領は大統領令第9066号を発した。軍の司令官は「軍事地域」を指定することができ、その地域内への立ち入り等を制限することができるようになった。同年3月21日、連邦議会はこの命令への違反を犯罪として処罰する立法をした。5月3日、大統領令に基づいて西海岸全域が軍事地域に指定された。域内に暮らす全ての日系人に対して、彼らがアメリカ市民であるかどうかを問わずに、立ち退きが命じら

れた。彼らは強制収容所に送られることになる。

この命令に抵抗したコレマツは刑事訴追され、有罪判決を受けた。彼は上訴した。連邦最高裁は1944年10月11、12日に公判審理をし、同年12月18日に判決を言い渡した。コレマツにとっての敗訴判決である。連邦最高裁は、公共の安全 (public safety) に対する差し迫った危険 (imminent danger) への軍の統制を憲法上も正当化できるとした。9名の連邦最高裁判事のうち3名がこれに反対した。ジャクソン判事は、日系人の排除命令は人種差別であり、合衆国憲法第14修正の平等保護条項に違反すると述べた。終戦の約8か月前のことである。

コレマツ判決は長くアメリカにおける人種差別の汚点として知られてきた。しかし功績も残している。連邦最高裁はコレマツ判決で初めて、人種に基礎をおく区別の合憲性の審査は厳格な基準 (strict scrutiny) を用いなければならないと宣言した。この基準は黒人公民権運動の金字塔として知られるブラウン判決に引き継がれ、今もこの国の判例法として生き続けている。彼の両親の祖国の裁判所も同様の審査基準を採用し、若い法律家たちをその淵源となる国へと誘っている。

2017年にトランプ大統領はイランなどのイスラム教国の市民らの入国を禁じる大統領令を発した。連邦最高裁は2018年にトランプ対ハワイ判決でこの大統領令の合憲性を認めた。しかし、その法廷意見は、コレマツ判決に言及し、それが誤りであったことを認めた。ジャクソン判事の反対意見を引用し、コレマツ判決は憲法上受け入れられる余地はないと述べたのである。

コレマツは戦後ミシガン州デトロイトへ移った。当時ミシガン州では異人種間の結婚が合法とされていた。そこでキャサリン・ピアソンと結婚し、オークランドへ戻って2人の子をなした。晩年のコレマツはかつて自分が訴追された連邦地方裁判所に今度は自ら提訴し、かつての有罪判決を無効とする決定を得た。有罪を支持した連邦最高裁判決から約40年が経過していた。この裁判の法廷で彼は次のように述べた。

「私の事件についての連邦最高裁判決によれば、



寮からの眺め

アメリカ市民であるだけでは十分ではありません。彼らは、自分たちと同じように見える必要があると言うのです。この判決は間違いだと思いました、今もそう思っています。私の事件の記録が連邦裁判所に残っている限り、アメリカ市民は誰でも、彼らが私たちの国の敵のように見えるというだけで、刑務所に入れられ強制収容所に送られかねません。私は政府のしたことが間違っていたと認めてほしいのです。それによって、どんな人種のアメリカ市民にも、二度とこのようなことが起きないようにしたいのです。」



今私たちは公衆衛生 (public health) への差し迫った危険を御旗にした、国境封鎖に直面している。個別の検証を欠いた排除や隔離が正当化されつつある。日系アメリカ人青年が働いたオークランド港には今もクルーズ船が停泊してこの危機が去るのを待っている。私のいる古い大学の寮の窓からは、海の向こうにそのオークランドも見えている。次号ではこの素晴らしい眺めをもたらした留学のきっかけや、留學生活についてお伝えしたい。

